

近代

第15章 恐慌と第二次世界大戦 3. 第二次世界大戦 (1) 戦時統制と生活

ぼんしょうきようしゅつ
鳥取県下の梵鐘供出

解説

鳥取市内の未完了三ツといふのは（中略）今は国は焦眉の急に迫られあらゆる角度を超越して緊要やむなき要請となつていのであるから、区々たる感情・利害に拘泥し、又は理論・遊戯を繰り広げてゐる時でない。日本皇国民たるの自覚を以て速に国家の要望に應へられたい。

（前略）昨年来の梵鐘供出状況を検するに、昨年本運動が開始さるゝや真先に申込をなし、供出陣の一番乗りの名譽を博したのは気高郡湖山村金龍寺であつた。また、境町の光祐寺住職菅原眞哲氏は（中略）正に県下寺院の供出挺身隊□両勇士といふものである。（中略）

戦況悪化の下で、軍需利用のために社寺の梵鐘・金属回収が行われていたことはよく知られている。

この資料は、1942（昭和17）年時点での県下寺院の梵鐘供出の状況を伝える、大政翼賛会鳥取県支部が発行した『翼賛因伯』の記事である。

この記事では、まず国家の方策にいち早く応じ、梵鐘供出に協力的だった寺院・個人を褒めている。近代において村のすみずみまで整備されていく国家による「褒めるシステム」の機能を戦争協力体制構築に発揮させ、この「善行」を模範的行為と位置づけようとする支部組織の意図を読みとることができる。

他方で、鳥取市内にはこれに泥まず梵鐘の供出に抵抗する寺院もあつた。これら組織運動に同調しないものに対しては、日本皇国民として「常軌を逸す」る少数者の異端行為と断じ、地域や村社会で「圧力」を醸成しこれを押し潰していこうとする様子がみてとれる。

（担当：前田孝行）

参考資料

- ・大政翼賛会鳥取県支部『翼賛因伯』（1941年）
- ・岸本寛『鳥取県氏ブックレット 11 褒められた人びとー表彰・栄典からみた鳥取ー』（2013年）
- ・鳥取県政 100 年記念『目で見るととり百年』（1981年）

★の写真は教育活動以外での無断利用や転載を禁止します。



梵鐘の供出（昭和17年 国府町）
（鳥取県政100年記念
『目で見るととり百年』より引用）

『翼賛因伯』57号 昭和17年
12月20日（個人蔵）★